

# 和歌の修辞

しゅうじ 修辞	かいせつ 解説	れい 例
まくらことば 枕詞	<ul style="list-style-type: none"> <li>ある語句を導き出すために、その直前に置く修飾語。</li> <li>ほとんどの場合五音(仮名で五文字)からなる。</li> <li>その枕詞がどのような語句を導くか決まっている。(⇒主な枕詞)</li> <li>枕詞は普通は訳さない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ(古今集) (「ひさかたの」は「光」「天」「月」「雲」などを導く枕詞)</li> <li>いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る(古今集) (「むばたまの」「ぬばたまの」は「黒」「闇」「夜」「髪」などを導く枕詞)</li> <li>さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな(千載集) (「さざなみや」は「志賀」「大津」などを導く枕詞)</li> </ul>
じよことば 序詞	<ul style="list-style-type: none"> <li>ある語句を導き出すための修飾的な語句。</li> <li>七音(仮名で七文字)以上からなる。</li> <li>その序詞がどのような語句を導くかは決まっていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ(新古今集) (「いづみ川」の「いづみ」が「いつ見き」の「いつ見」を導いている)</li> <li>風吹けば沖つ白浪立田山夜半にや君がひとり越ゆるらむ(古今集) (風が吹くと沖の白波が「立つ」ことから「立田山」を導いている)</li> <li>わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし(千載集) (「干潮の時にも海面下にある沖の石のように」と、比喩によって涙で袖が乾く間もないことを示している)</li> </ul>
かけことば 掛詞	<ul style="list-style-type: none"> <li>同時に二つ以上の意味を重ねて用いられている語。(⇒主な掛詞)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>秋の野に人まつ虫の声すなり我かに行きていざとぶらはむ(古今集) (「まつ」は「待つ」と「松虫」の「松」の掛詞)</li> <li>山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば(古今集) (「かれ」は「離れ」と「枯れ」の掛詞)</li> <li>大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立(金葉集) (「いく」は「行く」と地名「生野」の「生」の掛詞。「ふみ」は「踏み」と手紙を意味する「文」の掛詞)</li> </ul>
えんご 縁語	<ul style="list-style-type: none"> <li>一つの歌の中に詠み込まれた互いに関連のある語。</li> <li>掛詞になっていることが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかになりゆくわが身なるらむ(新古今集) (「鈴鹿山」の「鈴」と関係が深い「振る」、「鳴る」を歌の中に詠み込んでいる)</li> </ul>
うたまくら 歌枕	<ul style="list-style-type: none"> <li>伝統的に和歌に詠まれてきた地名。</li> <li>特定のイメージをともなって用いられることが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>都をば震とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関(後拾遺集) (現在の福島県白河市にあった関所。都から遠い奥州の入口というイメージがあった)</li> <li>わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て(古今集) (現在の長野県北部の地名。月の名所で、月との関連で詠まれることが多い)</li> <li>朝ばらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪(古今集) (現在の奈良県の地名。奥深い山地で桜や雪との関連で詠まれることが多い)</li> </ul>
ほんかど 本歌取り	<ul style="list-style-type: none"> <li>古歌の趣向や表現を借用し、歌に深みを持たせる手法。</li> <li>もとになった古歌を「本歌」と言う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは(後拾遺集) (古歌「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」を本歌とする。この古歌より、「末の松山」を波が越えるという言い方で恋人の心変わりや指すようになった)</li> </ul>